

日本における乳幼児期の子どもをもつ父親研究の動向

宮本 知子・藤崎 春代

Trends in Research on Fathers with Infant Children in Japan

Tomoko MIYAMOTO and Haruyo FUJISAKI

Transitions in the role of the father were categorized according to research trends on fathers of infants in Japan. Then, the following six perspectives were examined. (1) Beginnings of research on fathers of infants. (2) Father as the mother's source of support. (3) Father who influences the child's development. (4) Growth as a father. (5) Parenting stress experienced by the father. (6) Support for becoming a father. Results suggested that the presence of the father is an important factor in raising children. It is concluded that further studies, focusing on fathers and on assisting fathers with raising children are required.

Key words : *father of infants* (乳幼児期の子どもをもつ父親), *growth as a father* (父親の成長),
parenting stress (育児ストレス), *support* (サポート)

はじめに

現在の日本の社会においては、他国に例をみない速さで少子高齢化を迎え、核家族化の進行、女性の社会進出、情報化による子育てに関する情報の氾濫などの環境の変化が加速し、家族のあり方や養育者および子どもを取り巻く環境に大きな変化が起きている。政府は、1990年の1.57ショックをきっかけに、1994年の「エンゼルプラン」策定、1999年の「新エンゼルプラン」策定、2001年の改正育児・介護休業法成立、2003年の次世代育成支援対策推進法の成立、2004年育児・介護休業法改正法成立など少子化対策を本格化してきている。これらの対策の中でも2002年の「少子化対策プラスワン」策定（厚生労働省、2002年）以降、男女共同参画の理念を主とした新しい少子化対策の段階に入っている。この時代の流れとともに、柏木・若松（1994）や新谷・松村・牧野（1993）のような親に関する研究や大日向（2005）や無藤・安藤（2008）に見られるような子育て支援や子育てサポートに関する書籍・研究なども増えてきている。また、実際の取り組みも行政や保育所などの場所を活用した社会福祉法人、NPO 法人など

で多岐にわたり実施されている。野口・榮・植村・小川・三浦・船越・竹内・大池・宮本・松村（2007）による子育て支援システムの構築に関する研究や先にあげた大日向（2005）による実践報告もなされており、これらを通して、子育て支援を担っている人たちが、現在子どもをもつ養育者のニーズを捉えながら子育て支援に取り組んでいる様子を垣間見ることができる。

しかしこれまでの養育者に関する研究では、心理学・社会学・医学関連分野全般において子育ての中心は母親という考え方から、多くにおいて「母親」を対象として研究が行われてきた。女性の社会進出が進んでいる先進諸国と比較し、日本においては結婚や出産を契機に退職する女性が多くを占め、その後専業主婦として子育てに専念している。だが、核家族が大半となった現在、たった一人の親、つまり母親だけに育児の全責任を負わせることは、子どもにとっても単一の社会化しか受け入れられないという点と、背負った責任を果たそうと母親が過度に介入し保護する事になりがちだという点でもマイナスである（柏木、1995）と言われている。核家族の中で専業主婦である母親が一人で育児を担うようになってき

た近年、社会問題として虐待や育児不安といった問題が指摘されている。それらの問題の多くに主に母親が悩み苦しんでおり、この問題解決について考えるときに、同じ養育者という立場であり最も身近な存在である父親を無視することはできないと考えられる。

子どもは父親・母親のもとで生まれ育てられるのであり、親について考えるときに母親のみに限定することは、子育て環境の視野を狭めることにつながると考える。大日向 (2005) が言うように、育児の責務を一人で担わざるを得ないような子育てから母親が解放され、皆で子どもの育ちを見守り、支える仕組み (子育て支援) の必要性が認知されることは、母親のみならず父親にも必要である。

そこで本稿の目的を、日本における乳幼児期の子どもを持つ父親の子育てに関する研究の動向を概観・整理して、これから進められるべき研究の方向性を提示することとする。

1. 父親役割の変遷と父親研究の開始

長く日本では母親が無職の場合、子どもを預かるといった援助の提供者は主に祖父母であり、それに比べると父親の役割は大きくないこと (落合, 1989) が報告されていた。船橋 (1997) は、Figure 1 に見られるように、父親に期待される子育て役割として「権威としての父親 (稼ぎ手・子どもの社会化)」から近代家族の「父親不在 (稼ぎ手)」の時代へ移行し、現在では「新しい父親像 (稼ぎ手・子どもの社会化・子どもの世話)」のあり方が模索されていると述べている。また大和・斧出・木脇 (2008) は“前近代社会の父親は「家長」として君臨するかたわら、子どもに対するしつけや職業教育などの「社会化」をおこなっていた。その後、明治末から大正期にかけて、父親はサラリーマン化し家庭から「不在」になった”と述べている。つまり、前近代社

会の時期においては、父親の役割については乳幼児期というより思春期・青年期などを視野に入れた捉えかたが主流であった。その後は父親のサラリーマン化により、戦後の復興期以降の産業高度成長は長時間におよぶ勤勉な労働者の働きを求めていたため、多くの父親は子育てにおける子どもの社会化の担い手という役割を果たしがたくなった。現在の父親が、自身は世話や社会化の担い手としての父親モデルが存在しない環境で育ってきた中で、今父親となりその役割をどのように担っていくべきなのか戸惑っているのは当然のことであろう。

このような時代背景の中で、家族社会学や発達心理学において幼少期の親子関係について多くの研究がなされてきていたが、それらの研究は1970年代まで「親」とはほとんど「母親」を意味し、親子関係研究において「父親は不在」であった (柏木, 1995 a)。心理学の領域で初めて父親の研究として体系的なものとして位置づけられるものは、Lamb (1975) によるものである。実母による子捨て・子殺し事件が相次ぎ、1970年代初め「コイン・ロッカーベビー事件」が社会現象となったことなど子育てを取り巻く環境の大きな変化もあり、邦訳 (Lamb, 1975 久米他訳 1981) が1981年に出版されて以来、国内において父親に対する研究・関心が高まる契機となった。

核家族化とともに平成以降の新しい父親像が求められてきていることが明らかになっており、Figure 1に見られるように新しい父親像では世話の担い手という乳幼児期からの父親役割が求められている (船橋, 1997)。つまり、家長としての父親像から、父親の雇用労働への変化にともなう父親不在、そして平成以降新しい父親像としてこれまでの稼ぎ手・社会化の役割のみでなく、世話の担い手としての役割も求められてきている (大和ら, 2008)。

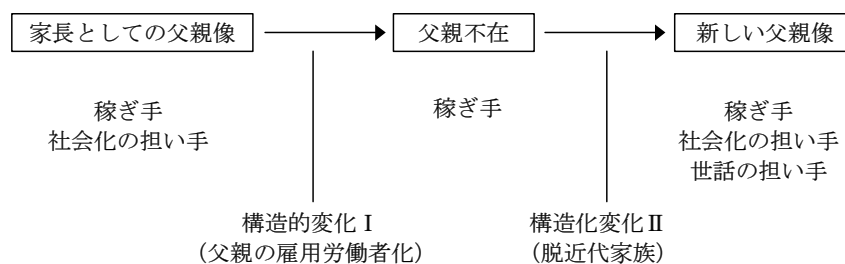


Figure 1 父親役割の構造的変化 (大和・斧出・木脇, 2008, p165)

このように社会構造の急激な変化により父親役割にも多くの役割が求められるようになり、「どんなふう子どもと接したらよいかかわからない」（読売新聞, 2008）というように、モデルとなる父親像がないままに新しい父親役割を求められる中で、遂行することに困難を感じて育児に焦りを感じる父親も現れている。

そのため、現在子どもをもつ父である男性とその父親との関係を捉えることは、これまでになかった世話の担い手そして父親不在により失っていた社会化の担い手としての役割獲得を円滑に進めるためにも必要であることが想像される。そして父親自身の父親モデルのアセスメント視点を含み、父親役割を「稼ぎ手」「社会化の担い手」「世話の担い手」という3つの側面から捉える必要がある。

2. 母親のサポート源としての父親

養育者の子育てサポートに関する初期の研究は、中山・小泉・福丸・無藤（2007）や安藤・立石・荒牧・岩藤・丹羽・砂上・堀越（2006）などに見られるように母親のサポートに関するものが多い。母親のサポート源の一つとして父親を捉えた研究は、父親のみに焦点をあてた研究と比較すると数多く見られる。

家庭内での育児の役割分担の割合については、「妻8：夫2」（29.3%）、「妻9：夫1」（29.1%）と子育ての負担は今なお母親に集中しているという実態（内閣府, 2007）や、日本の父親の家事・育児時間は1日48分と諸外国と比して著しく短いという実態（厚生労働省, 2006）がある。といわれているが、しかし、妻が性別分業に賛成の場合は、夫が家事を分担しても妻の満足感が高まらない（末盛, 1999）という結果もあり、育児の役割分担のみを夫

からのサポートとしてとらえることは、妻のサポート認知には必ずしもつながらない。

夫からのサポートをどのように受け取るかということが育児不安を軽減させる、という視点で考えると、夫の家事育児参加・妻の就労・妻の社会参加に関する夫の理解に満足しているか否かが関与している（牧野・中西, 1985）。また、宮本（2006b）によると、保健師が乳幼児健康診査において養育問題ととらえた事例に、育児に直接関係のない「夫婦不和」が子育てに影響を与えていたことが明らかになっており、数井・無藤・園田（1996）が明らかにした夫婦関係が母親の育児ストレスに関連していることと同様の結果が導き出されている。つまり、夫婦関係が良いことが母親の子育てにより影響を与えていることを示唆している。

子育て中の父親の育児参加に関しては、乳幼児期の夫の育児参加が、産後11年経った時点での妻の夫に対する愛情を規定する長期的な影響があることを示した研究も報告されている（菅原・北村・戸田・島・佐藤・向井, 1999）。このことは、夫の子育てへの参加が乳幼児期の世話の担い手という子育てサポート以上の妻の心理面への長期的な影響があるといえるであろう。

次いで、サポート源としての父親のあり方を考えるときに、共働き・片働きのどちらの環境にあるのかにより、実際に担う役割と期待される役割・子育てに対しての思いも大きく異なることが報告されている。例えば庄司・恒次・川井・吉田・安藤・尾崎・野尻・David・大藪・森田・倉繁・横井・若麻績・西林（1994）は、0～7歳の子どもをもつ夫婦1150組へのアンケート調査から、夫へ求める役割として、妻が就労している場合には具体的な育児・家事支援を、専業主婦では精神的な支えを多く求めていると述べている。Table 1

Table 1 夫の育児役割と妻の期待

		共働きの夫	片働きの夫
世話役割	実態	する	しない
	仕事との葛藤	ない（一部あり）	ない
社会化役割	実態	する	する
	仕事との葛藤	ある	ない
夫への妻の期待		「世話」を望む 「社会化」は夫婦で	「世話」は望まない 「社会化」は望む

（大和・斧出・木脇, 2008, p175）

(大和ら, 2008)にある「共働き・片働き別に見た夫の育児役割と妻の期待」をみても明らかのように、実際に共働きの父親は子どもの「世話」を妻と分担しておこない、「社会化」や「遊び」にも関わっている。対して片働きの父親は子どもの「世話」を妻に任せ、「遊び」のみに関わっている。また片働きの父親は共働きの父親と異なり、仕事が忙しく「世話」ができないことに対して葛藤を感じていない。このことから、夫婦の働き方により夫の役割実態や仕事との葛藤・妻からの期待も異なることが明らかである。共働きの夫に関しては、共働きの妻に見られるような仕事と育児役割の葛藤も見られ、反して片働きの夫は「遊び」のみに関わり、育児の楽しい面を享受し、妻もそれを認めている傾向にある。結果、共働き・片働きにより、母親が父親に求める役割と父親の育児への思いは異なり、その環境にあった子育てがあるといえよう。

3. 子どもと父親との関係

父親研究の中で、子どもの発達面との関連をみたものについては、大学生(青年期)を調査対象としたもの(山添 1981, 1982, 1983, 今泉 1984)が多くを占めていた。しかし、最近では乳幼児期の父親の影響の大きさから、乳幼児を対象とする研究が多く見られるようになってきており(中野 1992, 加藤・石井・牧野・土谷 2002)、父親についてのデータ入手方法についてもこれまでは大学生や母親を通じて得られてきたが、いまだ数は少ないものの父親に直接協力を求める調査・研究も見られるようになってきている。

子どもの発達における父親の役割には、母親を支える役割・子どもの発達を促す役割(母子の共生関係に介入する役割・子どもとかかわり母親と違った目で見守り支える役割)・子どもの性役割の発達を助ける役割が挙げられる(吉田・野尻・安藤・小林 1997)。母親を支える役割としてはサポート源という視点で前項にて取り上げたため、この項ではそのほかの役割について子どもの発達への影響・良好な父子関係が子どもに与える影響・子どもの性別にみた父親の影響の順に概観する。

まず、子どもの発達への影響について述べる。子どもの発達面をもとに父親役割との関連を取り上げている研究は多く見られ、中野(1996)は

「発達」を「大人の介入がなくても仲間で自分を保って行動でき、みたくて行動やつもり行動が明確な形で表現できる言語的・操作的な能力をもつこと」と定義して3歳児とその父親について研究した結果、「発達」の度合いが高い子どもは、父親とよく遊ぶ傾向があると述べている。また父親が「自分のことより子の世話を優先」し、「子の言いなりにならない」「してはいけないことを教える」といったしつけ行動をしていることも、部分的に子の発達とプラスの相関があることを明らかにした。同様に牧野・中野・柏木(1996)は、発達の度合いが高い子どもは母子分離が安定していて、濃厚な父子関係が育てられており、父親のはたらきかけへの反応性が高く、父親により満足を与えるため、より密度の濃い父子関係を作りやすいといえると述べている。柏木・若松(1994)は、3～5才の子どもをもつ親346組を対象にした研究で、子ども・育児に関して父親が肯定的な感情面だけを強くもっているのに対して、母親では肯定面と同時に否定的な感情をあわせもっていることを明らかにした。またそのような父親の育児・家事参加度の高さは母親の否定的感情の軽減と、父親自身の子どもへの肯定的感情を強めることを明らかにしている。このことは、子ども・育児に対する感情面については、母親と比較して父親は肯定的な感情面を強くもち、子どもと関わっていることを意味している。

次に良好な父子関係が子どもにどのような影響を及ぼすのかについてみる。

先に挙げた牧野ら(1996)による母親とは異なる父親の役割を見た研究によると父親と子どものかかわりは、夫婦での会話や家族との夕食回数など家庭優先の程度、父親になって良かったと感じる父親肯定感の程度と関連があり、家庭優先、父親肯定感の高い父親ほど、子どもと接近し遊ぶことが多く、その上で父親の働きかけへの子どもの反応性が高く、父親により満足を与えるため密度の濃い父子関係を作りやすいということが明らかにされている。他にも3歳児とその父親との関係から、父親になったことへ負担感・否定感を持たず、肯定的に受けとめている場合は子どもの発達はより促され、父子関係は父親の子どもへの関心や子どもに接近しようとする努力を含む父親としての意識の影響が大きいこと(中野, 1992)も明らかにされている。

最後に子どもの性別にみた父親の影響について述べる。子どもの性別によって父親の影響の差があることが報告されている。同性ということから男子への影響は女子と比較すると大きいといわれており、繁田（1987）によると2歳児の父親への愛着を両性で比較すると、女子の方が男子と比較すると弱い傾向が見られている。また加藤（1992）による3歳児の父親からみた子どもへのかかわり方に関する研究では、「男性意識」の強い父親は、女兒より男児に「接近」し、男児とよく「遊ぶ」傾向があり、「父親役割肯定感」が高い父親は男女ともによくかかわり、とくに女兒によく「接近」し「遊ぶ」傾向がみられた。つまり、男児には父親の「男性意識」が重要であり、女兒には父親の「父親役割肯定感」が影響することが明らかになっている。その他にも今泉（1991）による小学6年生を対象とした研究においては、男子の達成動機は父親の対処行動によって促進され母親の対処行動によっては促進されず、女子の達成動機は父親の対処行動・母親の対処行動両方に促進されていた。また青木（1993）による大学生を対象とした研究では、男子の進路に関しては父親が重要な影響力と発言が期待されていることが明らかにされている。父子関係の良好さや子どもの性別による父親のかかわり方の違いにより、父親の子どもへの影響は異なってくるという視点は忘れてはならないであろう。

4. 父親としての成長

生涯発達心理学という視点から、親の成長に関する研究が取り上げられるようになった。氏家・高濱（1994）や徳田（2004）に見られる母親の成長発達に関する研究は父親に先行して数多くみられる。

これまで述べてきたように、時代の流れの変化により新しい父親役割が求められるようになると同時に、父親自身の子育てへの思いも高まってきており、未就学児をもつ父親の希望は、「仕事と育児を同等に重視」が51.6%と半数を超えている（U F J総合研究所, 2003）。そして、実際に子育てに関与する度合いが大きい父親ほど、父親としての自覚が強く、人間としても成熟したと感じている実態がある（牧野ら, 1996）。このことは、子どもの成長発達にとってよい環境につながるだけでなく、子育てに父親も関わることで父親自身

の発達を促すことにつながっているといえる。

父親としての意識が現れる時期を考えると、女性と比して、妊娠・出産など身体的な変化をとまなう体験が得られない男性は、実際の育児を通じて初めて父性意識を獲得し、母親とは親性の獲得に時期のズレがあると言われている（及川, 2005）。この身体的変化からの親性獲得時期のズレと、里帰り出産などにより初期に父親役割を遂行する機会がずれることから、父親役割獲得の時期がさらに遅れる。親役割の獲得時期のズレが母親との役割意識のギャップを生み、父親役割を獲得するまで母親は「もう少し関わって欲しい」と切望しているのに対し、父親は「何をどう手伝ったらいいかわからない」といった状況が生まれ、本人の戸惑いだけではなく、父親と母親の間の葛藤も起きている。

その後の父親役割の形成については、1ヶ月頃までは妻を思いやるといった様子でなかなか父親としての意識は見られないが、4ヶ月頃から家族との生活が楽しいといったように生活に変化が現れはじめ、6ヶ月頃には、生きがいを感じたり、仕事に意欲がわいてくる等といった自分の生き方や存在を見つめる姿がみられるようになり、10ヶ月頃になった時点で、父親の自覚や父親の責任といったことを意識しはじめている様子がかがわれる（高橋・高野・小宮山・窪・丹羽, 1992）。この父親役割が形成される時期には、子育て中の父親の楽しく嬉しい事象は、日常生活でのやり取りの中での自分への反応と関連しており（内藤・植村・佐原, 2005）、父親になる喜びと育児参加の間に有意な正の相関がある（小野寺・青木・小山, 1998）ことも明らかになっている。

また先の小野寺ら（1998）の研究から、妊娠後期の初産女性とその夫280組へのアンケートより、父親になる意識として「制約感」「人間的成長・分身感」「生まれてくる子どもの心配・不安」「父親になる実感・心の準備」「父親になる喜び」「父親になる自信」の6因子が見出されている。そして、6つの父親になる意識の中でも「制約感」が高かった男性は、親になってから子どもと一緒に遊ぶのが苦手である・子どもの気持ちをうまく理解できないと感じており、父親としての自信も低い傾向がみられた。さらにこれらの男性は、自分の感情の変化や自己に対する関心が高い傾向が明らかになった。また川上・牛尾（2007）は、①核

家族の父親は、育児への役割分担が多くなるが、生きがい感や充実感を感じている。②父親の育児に対する「役割意識」には、父親としての自信と目標といった「肯定的役割意識」と他の人に育児を任せるといったような「消極的役割意識」があるという2点を明らかにした。そして前の研究を受けて川上・牛尾（2008）は、乳幼児をもつ、妻が就労している核家族の父親10名の面接調査から、父親の役割意識を高める要因と阻害する要因を明らかにした。父親の役割意識を高める要因としては、「子どもをもつことへの期待」「子どもとの関わりが増える」「生活を子ども中心に考える」「子どもを理解し、心が通じる」「子どもの人数が増える」「家族は自分が守るという思い」「自身の変化を肯定的にとらえる」の7因子が挙げられた。反対に父親役割意識を阻害する因子として、「子どもに関わることが少ない」「子どもの世話は母親が行なうもの」「仕事で疲労する」「父親としての実感がない」の4因子が挙げられている。

但し、このような役割獲得や意識の変化は、子育てに関与する度合いが大きい父親ほど父親としての自覚が強く、人間としても成熟したと感じており（牧野ら, 1996）、すべての父親が同じように役割を意識し役割獲得をしているわけではないことは明らかである。

鯨岡（2002）は親になることを「育てられる者」から「育てる者」への転換と考え、「育てる者」としての生き方や心理・社会的な構えを身につけることが親としての発達であるとし、また無藤・安藤（2008）は、子育てを通じての親の成長と変貌についてまとめると、「視野が広がる」「あいまいな状態・不完全な状態に耐えられるようになる」「自己へのこだわりを超え、他者への温かいまなざしを得る」と述べている。また柏木（1995b）は、おとなは子育てによって鍛えられ、学び直し、成長を遂げていく存在であるとしている。

以上のことから、親としての発達については、母親と父親との役割獲得時期のズレが存在することを勘案し、父親の意識の変化を丁寧に捉える視点をもちながら、父親の成長過程を描いていく必要がある。

5. 父親の育児ストレス

これまで述べてきたように、日本においては父親の育児参加が少ないことから、父親特有の育児

中のストレスやストレス構造の研究は少ない（柏木, 1999）。加えて保健医療従事者が育児中の父親と接する機会が限られており、研究対象とすることが困難であること（宮本, 2008）が挙げられている。

育児雑誌（ベビーエイジ）の特集で、育児ストレスという聞き方ではなく、「育児の悩みはあるか？」と258人の父親に質問したところ、77%の父親が悩んでいると答えていた（婦人生活社, 1995）。その後の雑誌の特集（婦人生活社, 2002 a・婦人生活社, 2002 b）においても、父親が育児の不安や悩みを抱えているという実態がレポートされている。精神科医でもあるスクールカウンセラーによって育児に悩んでいる父親への指南書として書かれた、「忙しいパパのための子育てハッピーアドバイス」は出版後1年間で35刷されており、父親たちがいかに子育てに不安や悩みを抱えているのかを垣間見ることができる（明橋, 2007）。また矢澤・国広・天童（2003）は、都市部に在住の父親は「育児が思うようにならない」あるいは「父親としての自信がない」「配偶者とのコミュニケーション不足」という悩みがあることを明らかにしている。

父親の育児ストレスについては、大和ら（2008）が、1歳半健診と3歳児健診の受診児の親へのアンケートから、育児ストレスの次元と尺度構成の検討により「育児負担感」「仕事と育児の葛藤」「育児疎外感」「育児意欲の低下」「父子関係不安感」の5因子からなる尺度を作成した。次いで父親の育児ストレスが生じる状況について、次の4点のようにまとめている。①「育児（特に世話は母親の仕事）」と思いながら、育児（とくに世話を）をせざるを得ない状況の中で「育児負担感」は生じる。②「育児をしたい」と思うのにもかかわらず、仕事のために育児に思うように関われない状況の中で「仕事と育児の葛藤」は生じ、「育児意欲」は低下する。③父親歴が浅く、育児に不慣れな状況の中で子どもとの関係づくりに不安を抱き、「育児疎外感」（自分は子どもに好かれていないと思う気持ち）は生じる。④父親歴が浅く、「育児は母親の仕事」と思いこみ、子どもと2人きりになる機会が少ない状況において「父子関係不安感」（妻なしで子どもと2人になるのを不安に思う気持ち）は生じる。このことから、父親歴や父親の育児に対する思いを考慮した育児ストレ

スの検討は必要であろう。

子育て期の父親たちの育児と仕事のバランス意識については、矢澤ら（2003）が3つに類型化し、それぞれの特徴を明らかにしている。①父親も母親も育児と仕事に同じように関わるとの意識を持つ「平等両立型」、②父親は同等で母親は育児優先の「二重基準型」、③父親は仕事優先で母親は育児優先の「性別役割型」の3つの類型化により、育児ストレスとの関連を検討した研究においては、「性別役割型」の父親は[仕事のストレス]が高く[家事の負担感]はほとんどなく、「二重基準型」では[仕事のストレス]が高く、[時間的な余裕のなさ]を感じるものの[父親としての自信]もあり[妻とのコミュニケーションもとれている]と感じている。「平等両立型」は[仕事のストレス]が最も低く、悩みは[仕事と家庭の両立][家事の負担感]そして[妻とのコミュニケーション不足]であり、働く母親が感じる悩みと共通していると考えられている。そのほか、育児に積極的に参加している父親は仕事を犠牲にしてさまざまな不安や悩みに耐えながら仕事をしているが、母親が無職であり育児を母親に任せている父親は、時間的余裕がある時に楽しみながら子育てに参加していること（長津，1993）も明らかにされている。つまり、共働きで子育てに携わっている父親には、働く母親と同じように仕事と家事の両立・夫婦のコミュニケーション不足に悩みながら過ごしている様子が見え、母親と同じように父親の状況を明らかにしたうえで何がストレスとなっているのかを明らかにすることが求められるであろう。

6. 父親になることへのサポート

妊娠出産することで母親になるのではなく、子育ての営みの中から母親役割を受容し、母親としてそして人間として成長していくことが明らかになっている（大日向，1988）。母親と同時に父親も子育ての中から成長していくと考えられる。

父子関係のスタートである乳幼児期の関係性が児童期さらには青年期へと持ち越されると考えるならば、現在の日本が直面している課題である「父親不在家族」を解決するためにも、これから父親になる男性、あるいは子育て経験の浅い父親を対象にした子育て支援は特に重要な意味をもつといえるであろう（大和ら，2008）。同様に近年、これから親になる前段階である思春期・青年期に

における親になるための資質の育成の重要性が唱えられている（伊藤，2006）。藤後（2007）によると、心理学の分野においても子どもを育てる性質を人間の発達課題としてとらえ、「親準備性」、「育児性」、「次世代育成力」、「養護性」などの概念で検討されつつある。実際に、宮本（2006a）による親準備性という視点での中学3年生を対象とした「思春期体験学習」の取り組みや藤後（2007）による子どもへの養護性を育む発達教育プログラムが中学生の学校生活、地域関係に与える効果、伊藤（2006）による青年たちの親性準備性を育成する教育の検討など、用いている概念は異なるものの親になるための資質の育成という視点で学校カリキュラムに組みながら先進的に取り組んでいる実践についての研究報告が示されている。

必要なサポートを受けること、また支えられているという感覚を持てることは親にとっても大切であり、適切なソーシャルサポートを受けられる事が育児不安を和らげるといわれている（大日向2002）。これは母親のみならず、父親にとっても同じことがいえるだろう。しかし、養育者にとってのソーシャルサポート研究の多くは、対象者が母親であり、父親を対象としたものはまだ数が少ない。時代の変化に合わせて父親役割に多くが求められ、また父親自身の子育てへの意識も大きく変化している現代において、父親を対象としたサポートのあり方についての検討は必要ではなかろうか。

以上のことを基に、育児支援の一つとして育児に対する父親の役割意識を高めるための支援方を考えるのであれば、川上ら（2008）が明らかにしているように、父親となる前の時期から子どもを理解し、関わる機会を増やし、その上で父親同士が気持ちや体験を共有する場を作る。また父親の就業方法を工夫することや、男女共同参画意識の啓発等が必要であろう。その上で、子どもの理解を促すような機会を増やし、父親同士の気持ち・体験の共有の場をつくり、父親の育児ストレス・育児負担感を減らすような取り組みが必要になるであろう。これらの取り組みは心理関係者・保健医療関係者・保育関係者・学校関係者すべてに共有される課題であり、父親への子育てサポートのあり方については今後より一層議論されるべきテーマであろう。

おわりに

日本における乳幼児期の子どもをもつ父親研究の動向について、父親役割の変遷と父親研究の開始・母親のサポート源としての父親・子どもの発達へ影響を及ぼす父親・父親としての成長・父親の育児ストレス・父親になることへのサポートの6つの視点から概観した。その結果、父親研究を進める上での今後の課題が以下のように整理できた。

- ① 父親役割を「稼ぎ手」「社会化の担い手」「世話の担い手」という3つの側面から捉える必要がある。
- ② 共働き・片働きにより、母親が父親に求める役割と父親の育児への思いは異なる。
- ③ 父子関係の良好さや子どもの性別による違いにより、父親の子どもへの影響は異なってくる。
- ④ 妊娠・出産を体験する母親と比較すると、父親役割の獲得には時間的なズレが起こっている。
- ⑤ 共働きの父親は片働きの父親と異なり仕事と育児の葛藤を抱いている。
- ⑥ 父親を対象としたソーシャルサポートや子育て支援に関する研究を進めていくことが重要である。

上記の6つを統合すると、まず父親について研究するときには「片働き」か「共働き」かに着目する必要がある。

その上で、父親は母親と比較して親役割の獲得時期のズレを抱えていること、そして「共働きの父親」は「共働きの母親」と同様に、仕事と子育ての葛藤があることを理解し、「片働きの父親」は、母親のサポート認知と絡めて子育てにおける父親の役割をみるという視点が必要であろう。

引用文献

- 明橋大二 (2007). 忙しいパパのための子育てハッピーアドバイス 一万年堂出版.
- 安藤智子・立石陽子・荒牧美佐子・岩藤裕美・丹羽さかの・砂上史子・堀越紀香 (2006). 幼稚園児を持つ母親のソーシャル・サポート—子どもの数に注目して—お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要, **3**, 31-37.
- 青木多寿子 (1993). 青年における身近な他者への役割期待の違いと性差—心理学研究, **64** (2), 140-146.

- 新谷由里子・松村幹子・牧野暢男 (1993). 親の変化とその規定因に関する一研究—家庭教育研究所紀要 **15**, 129-140
- 婦人生活社編 (1995). 『ベビーエイジ』 第26巻 第5号.
- 婦人生活社編 (2002 a). 『ベビーエイジ』 第33巻 第2号
- 婦人生活社編 (2002 b). 『ベビーエイジ』 第33巻 第6号
- 船橋恵子 (1997). 『父親役割の3類型』 比較家族史学会報告.
- 今泉信人 (1984). 大学生男子の達成動機とその父親像・母親増との関係—広島大学教育学部紀要, 第1部32号, 197-206.
- 今泉信人 (1991). 子どもの達成動機と子どもの達成行動に対する父親と母親の対処行動との関連に関する研究—広島大学教育学部紀要, 第1部39号, 195-202.
- 伊藤葉子 (2006). 青年たちの親性準備性を育成する教育の検討—父親役割を問い直す教材開発—家庭教育研究所紀要, **28**, 16-23.
- 柏木恵子 (1995 a). 「親子関係の研究」高橋恵子・柏木恵子編『発達心理学とフェミニズム』—ミネルヴェア書房.
- 柏木恵子 (1995 b). 親の発達心理学—今、よい親とはなにか—岩波書店 95.
- 柏木恵子編 (1999). 父親の発達心理学—父性の現在とその周辺—川島書店.
- 柏木恵子・若松素子 (1994). 「親となる」ことによる人格発達：生涯発達の視点から親を研究する試み—発達心理学会誌, **5** (1), 72-83.
- 加藤邦子 (1992). 父親の性意識と父子かかわりの関連について—家庭教育研究所紀要, 14号, 117-123.
- 加藤邦子・石井クンツ昌子・牧野カツコ・土谷みち子 (2002). 父親の育児かかわり及び母親の育児不安が3歳児の社会性に及ぼす影響：社会的背景の異なる2つのコホート比較から発達心理学研究, **13** (1), 30-41.
- 川上あずさ・牛尾禮子 (2007). 父親の育児への参加状況と育児に対する意識に関する研究—日本看護福祉学会誌, **12** (2), 142-150.
- 川上あずさ・牛尾禮子 (2008). 父親の育児に対する役割意識に関する要因とその支援方略—小児保健研究, **67** (3), 496-503.

- 数井みゆき・無藤隆・園田菜摘 (1996). 子どもの発達と母子関係・夫婦関係—幼児を持つ家族について 発達心理学研究, **7**, 31-40
- 厚生労働省 (2006). 子ども・子育て応援プラン—パンフレットデータ5
- 厚生労働省ホームページ「少子化対策プラスワン」
(<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2002/09/h0920-1.html>) (2008年12月10日)
- 鯨岡 峻 (2002). 「育てる者」から「育てられる者」へ—関係発達の視点から 日本放送出版協会.
- 久米 稔・服部広子・小関 賢・三島正英訳 (1981). 父親の役割—乳幼児発達とのかかわり 家政教育社.
- Lamb, M. E. (1975). Fathers : Forgotten Contributors to Child Development . *Human Development*, **18**, 245-266.
- 牧野カツコ・中西雪夫 (1985). 乳幼児をもつ母親の育児不安：父親の生活および意識との関連 家庭教育研究所紀要, **6**, 11-24.
- 牧野カツコ・中野由美子・柏木恵子編 (1996). 子どもの発達と父親の役割 ミネルヴァ書房.
- 宮本政子 (2008). 乳幼児を養育する母親および父親の育児支援に関する研究—育児ストレス構造の特徴と対処行動との関連— 小児保健研究, **67(5)**, 729-737.
- 宮本知子 (2006a). 中学3年生を対象とした「思春期体験学習」の取り組み 第53回日本小児保健学会講演集, 232-233.
- 宮本知子・伊達久美子・飯嶋純夫 (2006b). 市町村保健師の乳幼児健康診査における養育問題把握方法と内容 小児保健研究, **65(2)**, 322-330.
- 無藤隆・安藤智子 (2008). 子育て支援の心理学有斐閣.
- 長津美代子 (1993). 「親子関係と子どもの発達」 袖井孝子・岡村清子・長津美代子・三善勝代 共働き家族 家政教育社
- 内閣府 (2007). 『国民生活白書 (平成19年度)』
- 内藤直子・植村裕子・佐原玉恵 (2005). 0～3歳児をもつ父親の楽しい事象と悲しい事象及び役割の研究 香川大学看護学雑誌, **9(1)**, 7-15.
- 中野由美子 (1992). 3歳児の発達と父子関係 家庭教育研究所紀要, **14**, 124-129.
- 中野由美子 (1996). 「はじめの3年間の子どもの発達と父子関係」 牧野カツコ・中野由美子・柏木恵子編『子どもの発達と父親の役割』ミネルヴァ書房, 31-49.
- 中山美由紀・小泉智恵・福丸由佳・無藤隆 (2007). ライフスタイルと家族の健康の縦断調査第4報(1)—母親の完全主義傾向と心理的健康度の関連 日本心理学会第71回大会論文集, 1130.
- 野口純子・榮 玲子・植村裕子・小川佳代・三浦浩美・船越和代・竹内美由紀・大池明枝・宮本政子・松村恵子 (2007). 子育て支援システムの構築に関する研究—子育て支援センターを利用している母親の育児ストレスの因子構造— 香川県立保健医療大学紀要, 第4巻, 33-40.
- 落合恵美子 (1989). 「現在家族の育児ネットワーク『近代家族とフェミニズム』」 勁草書房.
- 及川裕子 (2005). 親性の獲得過程における変化とその影響要因の検討 日本ウーマンズヘルズ学会誌, **4**, 81-91.
- 小野寺敦子・青木紀久代・小山真弓 (1998). 父親になる意識の形成過程 発達心理学研究 **9(2)**, 121-130.
- 大日向雅美 (1998). 母性の研究 川島書店.
- 大日向雅美 (2002). 育児不安とは何か—発達心理学の立場から こころの科学, **103**, 10-15.
- 大日向雅美 (2005). 「子育て支援が親をダメにする」なんて言わせない 岩波書店
- 末盛 慶 (1999). 夫の家事遂行および情緒的サポートと妻の夫婦関係満足感 家族社会学研究, **11**, 71-82.
- 繁田進 (1987). 幼児期の父子関係：2・3歳児の父親へのアタッチメント 白百合女子大学紀要, **23**, 93-110.
- 菅原ますみ・北村俊則・戸田まり・島悟・佐藤達也・向井隆代 (1999). 子どもの問題行動の発達—Externalizing な問題傾向に関する生後11年間の縦断研究から 発達心理学研究, **10**, 32-42.
- 庄司順一・恒次欽也・川井尚・吉田弘道・安藤朗子・尾崎真理子・野尻恵・David Shwalb・大藪泰・森田英雄・倉繁隆信・横井茂夫・若麻績芳樹・西林洋平 (1994). 「育児における父親の役割と保健指導に関する研究」 育児に

- におけるアンケート結果のクロス集計(1) 厚生省心身障害研究報告書。
- 高橋種昭・高野陽・小宮山要・窪龍子・丹羽洋子 (1992). 小児の養育における父親の役割について 第3報 平成3年度厚生省心身障害研究「地域・家庭環境の小児に対する影響に関する研究」, 292-301.
- 徳田治子 (2004). ナラティブから捉える子育て期女性の意味づけ：生涯発達の視点から 発達心理学研究, **15(1)**, 13-26.
- 藤後悦子 (2007). 子どもへのナーチュランス(養護性)を育む発達教育プログラムが中学生の学校生活、地域関係に与える効果 保育学研究, 第45巻2号, 210-220.
- UFJ 総合研究所 (2003). 子育て支援等に関する調査研究報告書.
- 氏家達夫・高濱裕子 (1994). 3人の母親：その適応過程についての追跡研究 発達心理学研究, **5(2)**, 123-136.
- 大和礼子・斧出節子・木脇奈智子 (2008). 男の育児・女の育児—家族社会学からのアプローチ 昭和堂, 165.
- 山添 正 (1981). 大学生の父親像の研究 山梨大学教育学部研究報告, 第32号, 121-128.
- 山添 正 (1982). 大学生の父親像の研究(Ⅱ) 山梨大学教育学部研究報告, 第33号, 127-132.
- 山添 正 (1983). 大学生の父親像の研究(Ⅲ) 山梨大学教育学部研究報告, 第34号, 140-146.
- 矢澤澄子・国広陽子・天童睦子 (2003). 「若い父親の『父アイデンティティ』『都市環境と子育て』 勁草書房, 77-96.
- 読売新聞 (2008年9月29日) 赤ちゃんABC
 〈<http://www.yomiuri.co.jp/komachi/childcar/baby/20080929ok01.htm>〉 (2009年1月10日)
- 吉田弘道・野尻恵・安藤朗子・小林真理子 (1997). 育児における父親の役割と父親への援助に関する研究—その1：子どもの心理的問題と父親の役割との関連性— 小児保健研究, **56(1)**, 20-26.

(みやもと ともこ 生活機構研究科生)

(ふじさき はるよ 生活機構研究科)